口演 | 体位保持

2025年11月27日(木) 13:00 ~ 14:00 第6会場（海峡メッセ下関　8F 804会議室）

[O-G001] 体位保持１

座長：三裏 進（介護老人保健施設三滝ひまわり）

13:00 ~ 13:08

[27-O-G001-01]

介護リテラシーの向上
押さえるべき介護のポイント“ポジショニング”

鹿児島県　○宮城 明日香, 春別府 稔仁 (介護老人保健施設　サンセリテのがた)

13:08 ~ 13:16

[27-O-G001-02]

目指せ！！ピンピンコロリ！
～職員意識の実態と課題～

広島県　○宇野 僚太, 坂本 尚子, 清水 麻衣, 橋尾 朋宏 (ビーブル神石三和)

13:16 ~ 13:24

[27-O-G001-03]

職員の腰痛軽減に向けて
～古武術介護法の導入～

山口県　○冨田 康平, 益原 幹人, 山崎 佳代子, 前川 剛志 (介護老人保健施設　宇部幸楽苑)

13:24 ~ 13:32

[27-O-G001-04]

「ノーリフティングケア」普及への取り組み

三重県　○大西 陽奈 (介護老人保健施設あのう)

13:32 ~ 13:40

[27-O-G001-05]

身体的負担を軽減する「人にやさしいケア」の実現
～適正な福祉用具の活用を目指して～

石川県　○上山 敬, 松田 依子, 千綾 亮裕 (金沢春日ケアセンター)

13:40 ~ 13:48

[27-O-G001-06]

ポジショニングの対応と介護職員への意識調査について

神奈川県　○鈴木 健太 (介護老人保健施設　ゆめが丘)

13:48 ~ 13:56

[27-O-G001-07]

ノーリフティングケアの定着をめざして
寿生苑の取り組みと課題

島根県　○高野 伊都子, 來間 厚子, 尾添 由起子, 山岡 鮎美 (介護老人保健施設　寿生苑)

©2025 公益社団法人 全国老人保健施設協会

口演 | 体位保持

2025年11月27日(木) 13:00 ~ 14:00 第6会場（海峡メッセ下関　8F 804会議室）

[O-G001] 体位保持１

座長：三裏 進（介護老人保健施設三滝ひまわり）

13:00 ~ 13:08

[27-O-G001-01] 介護リテラシーの向上

押さえるべき介護のポイント“ポジショニング”

鹿児島県　○宮城 明日香, 春別府 稔仁 (介護老人保健施設　サンセリテのがた)

【背景】
　体位交換やポジショニングは、特に寝たきりの利用者の関節拘縮進行予防や褥瘡予防において重要な役割を果たす。当施設では専門棟介護職(以下CW)からリハビリ職に対してポジショニングに関する相談を受ける機会が多くあったものの、実際には側臥位のポジショニングを提示しても、クッションの配置が不十分で仰臥位になっていることが多いことや、適切なポジショニングが行われず安楽肢位を確保できないことで、筋緊張の亢進や関節拘縮の進行がみられ皮膚状態の悪化や着脱介助の困難に繋がる事例もあった。ポジショニングに関して、当施設においてもCWへの指導や実践能力の改善を図る必要性を強く感じるようになったため、現状のCWのポジショニングに関する知識や実践能力を評価し、具体的な課題を明らかにすることが必要であると考えた。
【目的】
　CWを対象にポジショニングの知識と実践能力を評価し、現場における課題を明確化することを目的とする。得られた結果を基に、効果的な指導法や研修プログラムの検討を行い、ポジショニング技術の向上を通じて介護リテラシーを高めて利用者の生活の質向上を目指す。
【方法】
　“ケープのポジショニングコンパクトガイド”を参考に指導および評価を実施した。令和6年10月にCW19名を対象に、側臥位のポジショニング指導を実施、同年11月ポジショニングの理解度を評価するため写真テストと実技テストを行った。
　写真テストでは、CWに対して行ったポジショニング指導を基にクッションや上肢の位置が適切ではない写真と適切な写真を計5枚提示し、不適切箇所を指摘できるかどうかによってポジショニングの理解度を評価した。
　実技テストでは、寝たきりの利用者2名を対象に1.背中のクッション位置、2.下肢のクッション位置、3.体幹のねじれ、4.クッション配置後の隙間、5.ポジショニング方法、の5つの評価項目を設け減点法でポジショニングの実践能力を評価した。
　これらの評価項目について、写真・実技テストそれぞれ0～5点で採点を行い、4点以上を合格基準とした。
【結果】
　写真テストでは、19名中12名が合格し、満点取得者は5名であった。合格者の内5名が有資格者であり、満点取得者の有資格者は1名(介護福祉士)であった。実技テストでは19名中2名が合格し、満点取得者はいなかった。合格者2名は資格を有していなかった。
　写真テストでは、枕や下肢クッションの隙間、肩関節の適切な位置調整の2項目において理解できていないCWが多かった。実技テストでは、1.背中のクッション位置、3.体幹のねじれ、4.クッション配置後の隙間の3項目において実施できていないCWが多かった。
【考察】
　本研究の結果から、CWの大半はポジショニングに関する基本的な知識は持っていたが、実技テストにて十分な実践能力が身についていないことが明らかとなった。このことから、当施設

©2025 公益社団法人 全国老人保健施設協会

ではオムツ交換や臥床介助の際に体位交換は行えているが、その後の適切なポジショニングは実施できておらず、それが筋緊張亢進や関節拘縮進行に伴う四肢の可動域制限や、褥瘡発生の予防治癒の妨げの要因になっていると考えられる。

当施設の専門棟では、介護未経験者や外国人CW(技能実習生)の割合が多く介護福祉士の資格を有する者の割合が少ない。体位交換や褥瘡予防の基礎はCW同士で業務を通じて指導・伝達が行われ習得されていたが、ポジショニング技術について理解できているCWが極端に少ない為、誤った知識が伝達され技術の定着が妨げられていると考える。今回のテストでは、資格の有無と知識・実践能力との間に明確な関連性は認められず、有資格者であっても必ずしも十分な知識や実践能力を備えているとは限らないことが明らかとなった。また、以前よりリハビリ職によるポジショニング指導は、相談してきたCWに対して個別指導や対象者のベッドサイドにポジショニング写真を掲示する形で実施されていた。このような指導方法ではCW個人の能力やポジショニングに対する意識に依存する部分が大きく、施設全体で取り組む形には至らないと考えられる。その結果、知識習得と施設としての介護力向上につながらなかった可能性がある。

さらに、誤ったポジショニングが筋緊張の亢進や関節拘縮の進行を招くリスクが高いということが十分に理解されていない点も課題である。現場では主に「褥瘡予防」の視点でポジショニングが行われ、横向きにする、踵を浮かせるといった対応にとどまっている。しかし、適切なポジショニングは褥瘡予防だけでなく、快適性の向上や筋緊張・関節拘縮の予防にもつながる重要な技術であり、その認識を深めることが今後の指導・研修の課題となる。

【結語】

本研究を通じて、CWのポジショニングに関する知識と実践能力を評価し、現場における具体的な課題を明確化することができた。

ポジショニングに対する認識の低さ、施設全体での指導不足、ポジショニングによる効果に対する理解不足が明らかとなった。

介護福祉士養成教育においてポジショニングは重要視されつつあるが、具体的な技術教育が行われていないことが課題となっている。

これらの結果を踏まえ、CWの実践能力を向上させるためには、日常業務の中でポジショニングを意識する習慣を身につけるとともに、定期的な研修やテストを継続的に実施することが必要である。また、職員が利用者の立場を体験する研修の導入を検討し、ポジショニングの重要性を実感する機会を増やして、応用力のある技術習得を促進することが介護リテラシーを高めて利用者の快適性や生活の質を向上させると考える。

©2025 公益社団法人 全国老人保健施設協会

口演 | 体位保持

2025年11月27日(木) 13:00 ~ 14:00 第6会場（海峡メッセ下関　8F 804会議室）

[O-G001] 体位保持１

座長：三裏 進（介護老人保健施設三滝ひまわり）

13:08 ~ 13:16

[27-O-G001-02] 目指せ！！ピンピンコロリ！
～職員意識の実態と課題～

広島県　○宇野 僚太, 坂本 尚子, 清水 麻衣, 橋尾 朋宏 (ビーブル神石三和)

「はじめに」　当施設において、年末に発生したCOVID-19の集団感染により長期臥床を余儀なくされ、その間多くの廃用性症候群の進行が認められた。リハビリ部として廃用を防止し生活機能の維持を目的に積極的な離床支援や椅子への座り替え、重度介助者に対しては車椅子のたわみにベニア板を導入し体性感覚へのアプローチによる体幹筋群への賦活を図る取り組みを行った。それでも、高齢者の廃用が進む速度は速く、看護・介護にも離床や椅子への座り替えを進めるための支援を一緒に行うよう依頼する。しかし、限られた人員の中で離床頻度を増やすことは負担が大きく協力は得られにくい状態であった。また感染症終息後も日中の椅子への座り替えや姿勢の崩れに対する姿勢調整の支援を継続するため、足台を作成し足底設置をするよう協力を依頼するも日々の業務の中で積極的な協力は得られにくい状況が続いている。
そこで今回なぜ椅子への座り替えや、車椅子上での姿勢調整、足底設置が定着しないのか要因を探り今後の課題を明確にすることを目的に職員を対象にアンケート調査を実施したのでここに報告する。
「目的」　職員の移乗支援に対する認識・実態を把握し、車椅子において、座位姿勢が崩れやすい症例に対し、セラピストや看護・介護職員が同じ認識をもって、PDCAサイクルに基づき利用者の能力の維持・向上に取り組める体制を作る。
「対象と方法」当施設入所フロアに勤務する看護・介護職員35名を対象。アンケート用紙を配布し自記による回答を求めた。回答は無記名、選択式とし、その理由を自由記載とした。
アンケート結果を集計し、自由記載については、筆者と共同研究者で個別に分類した後、互いの分類について議論の上で内容の分類を行った。
「結果」
アンケート回収率は約7１％(25名)
性別：男性　5名　女性　20名
年代：20代　5名　30代　5名　40代　9名　50代　3名　60代　3名
うちEPA:2名　技能実習生は5名　その他海外から就労者:1名
経験年数:1年未満:3名　3年以上5年未満:5名　5年以上10年未満:3名　10年以上:14名　持病(腰痛など)の有無：あり　60%(15名)
移乗介助が最も負担と感じる環境はどこですか：ホール(椅子と車椅子間) 50%(14名)　居室(ベッドと車椅子間) 36%(10名)　その他(トイレや浴室) 14%(4名)
理由：アームサポートの着脱ができない。座面の高さ調整がし辛い。
施設内に福祉用具(スライディングボードやラクラックスなど)があることを知っていますか：知っている 96%(24名)　知らない 4%(1名)
普段からそれらの福祉用具を活用していますか:　はい　70%(16名)　いいえ　30%(7名)
移乗方法の手段としてボディメカニクスやノンリフティングケアを使った移乗方法を知っていますか:　はい　80%(20名)　いいえ　20%(5名)
それらの手技を普段から活用していますか:　はい　61%(14名)　いいえ　39%(9名)
それらの手技を習得し活用したいですか：　はい　76%(16名)　いいえ　24%(5名)

©2025 公益社団法人 全国老人保健施設協会

普段車椅子で長時間座って過ごす際、足底設置させることが入所者にとって様々な点でメリットが大きいことは知っていますか：　はい　100%
ただし、普段から足底設置させることに対し、足をおろす際にしゃがむのが負担であるや膝の拘縮が強い方や利用者自身が拒否的であるのに足底設置させることが有益であるとは思えない、姿勢を整えてもすぐに崩れてしまい気持ちが萎える等の意見があげられた。
全体を通して定着できない要因は物理的環境因子が49%、人的因子が29%、知識・技術等の因子が22%であった。
「考察」
今回のアンケートの結果、ホールでの椅子での座り替えが進まない要因はアームサポートの着脱ができないことや座面の高さ調整がし辛いといった物理的環境因子が最も多く、次いで、座り替えを行うことでのメリットが感じられない、移乗頻度が増えるので負担だといった人的因子によるものがあった。また、福祉用具の正しい使用方法やボディメカニクス等といった手技の獲得も実践する経験が少なく、一人で行うには不安があるため使用していないといった理由が多く聞かれた。それらは、施設内で行われている実践形式の技術伝達研修の機会が少ないことや、移乗支援は基本的に一人の職員で単独で行うため、習得率の未熟な手技の使用を遠ざけていることが要因であると思われた。さらに意見の中には、「姿勢を直してもすぐに崩れてしまうため気持ちが萎える」といった意見もあり、介護職として仕事に従事する中で即時的な変化の感じにくい高齢者のケアにおいて、自己効力感を感じにくくなっていることが問題点として考えられる。職業生活において、日向(2021)は、企業労働者の心理的居場所感の因子のうち、「安心感」「役割感」「本来感」が知識提供行動を促進し「安心感」「役割感」が知識獲得行動を促進することを明らかにした。
当施設における看護介護職は、各勤務帯で業務がマニュアル化されており、日替わりで業務内容が変わるため、利用者個人の経過を追いにくい側面がある。またケアプランの評価は担当制となっているが、シフトの関係でカンファレンスに参加し、目標や今後の展望等について担当者と協議する機会が少ない現状がある。これらの体制を見直し、介護職自身が担当者の目標の設定や進捗状況を評価し、目標を設定するといった「役割」を持つことが、自己効力感へと繋がり、新しい知識や技術への獲得行動の促進となるのではないかと思われた。
リハビリ部としても、利用者の「できる」能力を伝達する場を設け、動画を録画しいつでも閲覧可能な状態にしておくことや福祉用具の活用やボディメカニクス等の普及するため実践形式で研修を行うよう努めてく。また最も多かった環境因子に対しては利用者に応じた車椅子の選定、ベニア板の厚みや長さ、形状の工夫や素材の検討を行い、利用者や介助者が共に最適な環境となるよう取り組んでいく。

©2025 公益社団法人 全国老人保健施設協会

口演 | 体位保持

2025年11月27日(木) 13:00 ~ 14:00 第6会場（海峡メッセ下関　8F 804会議室）

[O-G001] 体位保持１

座長：三裏 進（介護老人保健施設三滝ひまわり）

13:16 ~ 13:24

[27-O-G001-03] 職員の腰痛軽減に向けて
～古武術介護法の導入～

山口県　○冨田 康平, 益原 幹人, 山崎 佳代子, 前川 剛志 (介護老人保健施設　宇部幸楽苑)

【はじめに】
　腰痛は、働く人が業務において罹患することが最も多い疾病であり、全業務上疾病のうちで約６割を占める。これを予防することは労働衛生分野における重要な課題となっている。これまでも行政において重要施策として掲げられ、腰痛の予防対策が推進されてきた。
　職場における対策として、平成6年9月6日(基発)第 547 号「職場における腰痛予防対策指針」において、一般的な予防対策のほか、介護作業等腰痛が多く発生している作業について、個別の対策や腰痛予防体操等が示されている。
　このように、現在に至るまでさまざまな対策が立てられ、多くの事業場において対策の周知・普及が図られている。しかし、依然として腰痛は大きな課題として職場に存在する。 特に、介護業務においては、腰部に過重な負担のかかる作業が多く、実際に、介護業務を含む保健衛生業において発生する業務上疾病のうち、約８割を腰痛が占めている。
　今後、老人介護分野においては、介護労働者の高齢化が見込まれ、腰痛についてもその増加が懸念される。1)
【研究の目的】
　古武術介護法を使用した腰痛軽減効果を証明する事で、老健職員の腰痛軽減、人材不足に難渋している介護現場の離職防止を目的とする。
【倫理的配慮】
　本研究は当法人倫理委員会の承認を受け実施した。研究対象者、またはその代諸者(家族等)に研究の目的、主旨を説明した。その後に研究への参加の自由を保証し、不参加や辞退することで不利益を被らないこと、匿名化などにより個人が特定できない方法をとり、学会などで発表する時には個人情報は一切含まれないこと伝え、承諾を得た。また、当法人のホームページにてオプトアウト方式で内容を掲載し対応している。
【研究期間】
令和7年4月7日～令和7年12月末日
【対象と方法】
職員に対してNRS（Numerical Rating Scale）とRDQ（Poland-Morris Disability Questionnaire）の日本語版を利用して腰痛を評価した。
　NRSの点数が5点未満と5点以上で群分けし、その中から古武術介護法を使用する職員を9名選別した。選別方法は年齢、性別を考慮した。
　協力頂く入所者12名をX群6名（平均介護度3.88）、Y群6名（平均介護度3.66）に選別した。選別方法としてはどの重介護の入所者に使用しても、有効であるか確かめる為、平均介護度を考慮した。
　古武術介護法を実践する介護業務として職員へのアンケートで最も負担度の高い、移乗動作、ベッド上での水平移動に限定した。
　古武術介護法の実施方法としてはX群・Y群に対し、前半45日間、後半45日間でインターバル無しに入れ替え、前半終了時と後半終了時後に再度NRSとRDQを測定し、その結果を統計処理

©2025 公益社団法人 全国老人保健施設協会

（Wilcoxonの符号順位検定）して判定した。

【結果】

開始時、前半終了時、後半終了時の其々の値で統計処理を実施したが症例数が少なく、有意差は認められなかった。その為、各期間のNRS、RDQの平均値、中央値、標準偏差値で比較した。

NRSの開始時の平均値は3.22±3.22(小数点第2位)、中央値３、前半終了時の平均値2.44±2.98、中央値１、後半終了時の平均値は1.77±2.14、中央値０、開始時と後半終了時の差の平均値-1.44±1.64、中央値０という結果になった。

RDQの開始時の平均値は4±4.73、中央値０、前半終了時の平均値1.88±2.84、中央値０、後半終了時の平均値は1.44±1.89、中央値１、開始時と後半終了時の差の平均値-2.55±3.59、中央値０という結果になった。

結果として有意差は認められなかったがNRS、RDQの点数は開始時より終了時の方が減少し、腰痛が軽減したことは認められた。（図１）（図２）

【考察とまとめ】

古武術は、古くから日本に伝わる武術である。古武術の 特徴は武士が、刀がなければ棒切れで、棒切れがなければ素手で戦うというように、ひとつの体の動きをあらゆる場面で応用できることである。体の動かし方の特徴は、筋力に 頼らず、体の構造に最も適した合理的な動きをすることである。この古武術の体の動かし方をヒントに、動きの原理 をまとめ、それを介護技術に応用したものが「古武術介護」 である。2)

今回、データ数が少なく、有意差が出せなかったものの、古武術介護を参考とした介護法を使用することでNRS,RDQの点数では、平均値、標準偏差値、中央値が減少している。

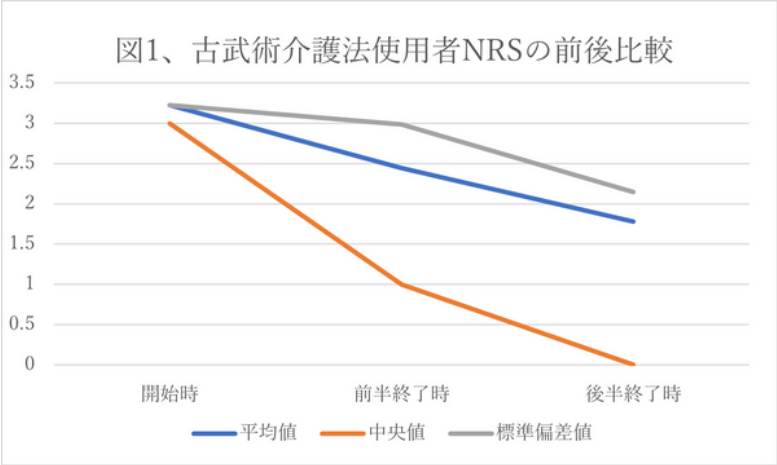
古武術介護を実施し、職員の意見として多かったのが痛みの軽減、動作時の楽さが多くあった。これらの要因として介助時の体幹の前屈運動が少なくなったためであると考えられる。
文献では、立位姿勢の椎間板内圧を100とすると、前かがみでの座位や腰を曲げての持ち上げ動作などは立位の2倍以上の負担が腰へ掛かるとされる。4)

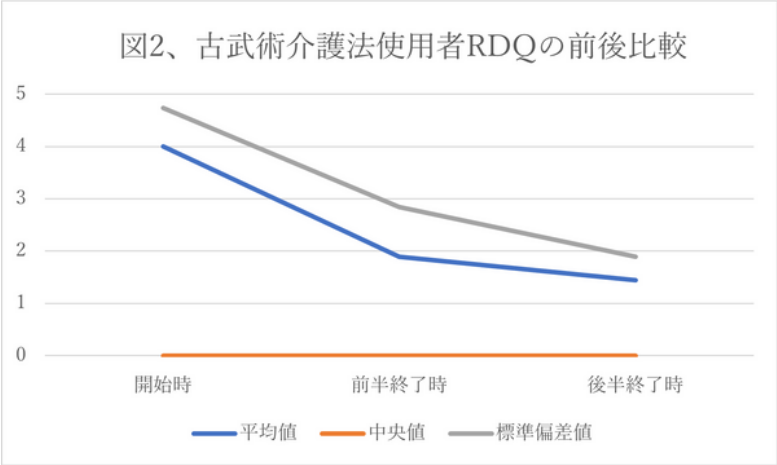
更に腰椎の可動域は屈曲４０から５０°、伸展１５から２０°、側屈２０°、回旋５から７°とされており、従来の介助時に被介護者を抱えながら上記のような可動域を超える無理な体制をとることで、腰痛に影響を及ぼす筋肉や靭帯の連携を崩すこと、脊椎に何らかの疾患を有する者は脊柱管内の圧力が高まることで痛みを誘発させる原因となる。

一方で、今回使用した移乗動作方法であれば重心が一体化しやすいこと、ベッド上での水平移動も被介護者の体を自分の方向へ引くことにより介護者との距離が近づき介護者の重心を低くする事で無理な体制にならない環境が作れたために腰痛の軽減につながると考える。しかし、古武術介護法はスキル習得に時間がかかることや職員・入所者の個人差・体格差・認知力の差により、使用する事が難しいという意見も一定数あった。

今後は、データ数を増やして、上記の課題を解決し、古武術介護法の腰痛軽減効果を証明して、介護現場の離職防止に繋げたい。

©2025 公益社団法人 全国老人保健施設協会





©2025 公益社団法人 全国老人保健施設協会

口演 | 体位保持

2025年11月27日(木) 13:00 ~ 14:00 第6会場（海峡メッセ下関　8F 804会議室）

[O-G001] 体位保持１

座長：三裏 進（介護老人保健施設三滝ひまわり）

13:24 ~ 13:32

[27-O-G001-04] 「ノーリフティングケア」普及への取り組み

三重県　○大西 陽奈 (介護老人保健施設あのう)

【はじめに】当施設ではノーリフティングケアの推奨をしており、介護業務で腰痛などで業務制限を余儀なくされることがあり、ノーリフティングケアを行うことで介護技術向上や職員・利用者の負担軽減と安心安全な生活ができるよう施設全体での取り組みを報告する。移乗介助に着目しスライディングボードを導入。多職種間で普及活動を行い、職員の腰痛症状の改善、利用者への身体的負担、福祉用具に対する意識の変化が得られた為ここに報告する。
【対象】当施設に勤務する介護士・看護師と利用者
【方法】実施期間　2023年5月10日～2024年5月10日
福祉用具（スライディングボード）導入し腰痛を感じる介護業務、現在の腰痛の具合。利用者への身体的負担（内出血、剥離等）その後、導入後のアンケートとして、スライディングボードの使用感や活用頻度、腰痛症状・興味関心度の変化、今後新たな福祉用具を使用してみたいかを調査。
【結果】腰痛を感じる介護業務としては、移乗介助（車椅子・ベッド間の移乗）（入浴介助時のストレッチャー移乗）の場面が多くあげられる。腰痛の有無についてはアンケートを実施し移乗介助時のスライディングボードを使用してからの腰痛・介助時の身体的負担が軽減したことや利用者への身体的負担もかなり軽減したとアンケート回答が多くあった。スライディングボード導入し、実際使用したことで職員の興味・関心度がアップした。中にはスライディングボードを使用せず人力で介助を行った方が早いことや使い方がわからない・難しい、設置場所が離れており使用するのに時間がかかるといった理由がある。と回答した。
【考察】スライディングボードへの興味関心度は、使用前に比べて介護業務の負担軽減や職員の関心・利用者への身体的負担軽減が伺えた。またスライディングボード活用に至らず「ノーリフトケア」を実践できていない要因として、使用に関する不安や知識不足、設置環境等の問題が考えられた。今回普及の為、不安のある職員へのスライディングボード研修・指導やボディメカニクス理論を含めた教育、活用を促したことで、8割以上の職員がボードを積極的に使用している。福祉用具に対する苦手意識が幾分か軽減され、使用率の向上に繋がった結果であると考える。職員間からも、新人職員への指導や環境整備、対象とする利用者の検討等に積極的な介入と協力を得られた。それに付随して、移乗介助時の腰痛症状に改善がみられている。スライディングボードを積極的に活用し習練を重ねたことで技術面の向上が得られ、腰部に負担の少ない円滑な介助が可能となったことが要因であると考える。
【まとめ】介護職員・看護職員の業務負担、人材不足が問題とされる現代において、ノーリフティングケアの普及が必要である。腰痛予防やケアの質の向上の実感といった成功体験を積み重ねることにより「ノーリフティング」の更なる普及に繋がると考える。職員一人ひとりが意識し取り組むことで、職員・利用者の安全で安心なケアを提供できる施設を目指して、今後も活動を続けていきたい。

©2025 公益社団法人 全国老人保健施設協会

口演 | 体位保持

2025年11月27日(木) 13:00 ~ 14:00 第6会場（海峡メッセ下関　8F 804会議室）

[O-G001] 体位保持１

座長：三裏 進（介護老人保健施設三滝ひまわり）

13:32 ~ 13:40

[27-O-G001-05] 身体的負担を軽減する「人にやさしいケア」の実現
〜適正な福祉用具の活用を目指して〜

石川県　○上山 敬, 松田 依子, 千綾 亮裕 (金沢春日ケアセンター)

【はじめに】
当施設において、入所利用者の重度化に伴う移乗介助時の身体的負担を軽減し、かつ安全に移乗する介助方法としてスライディングボード・スライドシートの活用を推奨している。しかしこれらの福祉用具を正しく使用できないことで、かえって職員、利用者双方に負担がかかり、腰痛を助長する危険をはらんでいた。そこで外部機関が実施する「ひとにやさしいケア（適切な福祉用具の活用と、もちあげない介護のスキルアップ研修）」を修了した職員を中心に、フロア介護職員全員が適切な移乗介助方法と、臥床時の適切なポジショニングの習得を目指し取り組むこととした。
【対象フロアの状況】
利用者定員50名の一般棟であるが、半数以上の方が認知症の診断を受けている。ADL能力の低下から、移動時の車椅子使用者が20名、その中でスライディングボードの活用対象者は10名程おられた。取り組み開始前は利用者がスライディングボードの上を浮いて移動してしまうなど、活用方法が不適切であったりスライディングシートについても同様に正しい敷き込みが出来ておらず、思うようにベッド上での身体の移動が出来ない事があった。その為、腰痛で悩む職員にとってはより負担となる場合があった。
【取り組み内容】
適切な福祉用具の活用を図り利用者が安心したケアを受け、職員の介助負担の軽減にも繋げるという目標を掲げた。
取り組み1.フロア職員を対象に腰痛の有無を調査、取り組み2.スライディングボードの活用講習、取り組み3.スライディングシートの正しい使用方法の講習、取り組み4.ポジショニング講習、取り組み5.チェックシートによる個別の技術評価を行い、習得状況を確認した。各講習会と個別技術評価はそれぞれ合計3回実施。なお技術評価については講師の一人でもあるOTの協力のもと、独自の技術チェックシートを作成し共同で評価を行なった。細かなところまで習得してほしいという講師側の思いから、評価の際の技術チェックを13〜15項目設けた為、講習を受ける職員には事前に配布し目を通してもらうことで予習になり、受講時の説明でより理解を深められた。スライディングボード講習会は５回実施し準備、差し込み、送りだし、抜き取りの15項目のチェック内容でポイントは持ち上げない、ベッドや車いすでの座位姿勢、腰をひねらない重心移動を体験した。スライディングシート講習会は４回実施し準備、敷きこみ、上方移動、横移動、抜き取りの13項目のチェック内容でポイントは引きずらない、力任せにしない、身体の重さが乗っている箇所を意識する事を体験した。どちらの福祉用具でも共通のポイントは持ち上げない、引きずらない、力任せにしない、自分の重心移動を利用する事だと伝えた。ポジショニング講習会は6回実施し何故ポジショニングをするのか、する事によって呼吸、嚥下、拘縮などの二次障害の予防に繋がる事、重さをクッションに乗せることで安楽な姿勢が取れる、ポジショニングの必要性について伝達と体験を実施した。講習会以外でも職員同士で自主的に演習を行い、普段業務の中でも意識的に福祉用具を活用する機会を増やすようにした。
【結果】

©2025 公益社団法人 全国老人保健施設協会

技術習得を確認するチェックシートを用いた個別評価は、評価に偏りがでないよう実技評価を行う際の対象利用者をA様に限定して実施した。スライディングボード、シート共に取り組み開始当初に比べ徐々に習得率は上がっていき、最終評価では8割の職員が適正な活用が出来ていた。安全面だけを考慮すると全員が習得出来ていた。スライディングシートの活用評価では、ベッド上での利用者の横移動の介助で、職員自身の重心移動をうまくできないケースがよく見られたが、シートの敷きこみと抜き取りはほとんどの職員が出来ていた。腰痛に関しては、取り組み開始時に比べ腰痛のある職員は減少しなかったものの、新たな発症者なかった。

【まとめ】

移乗動作に入る際、福祉用具に利用者が慣れてくると「怖くない。」「これいいね、楽や。」等の声があがり、協力動作が得られる等、利用者、職員双方にとって負担のかからない移乗介助が出来るようになった。また、職員も正しく使用が出来るようになってくると「あの利用者さん、そろそろボード使った方がお互いに負担がないかも」と福祉用具の活用提案を積極的に行うようになった。今回の取り組みで多くの職員が適正に福祉用具を活用できるようになり、腰痛もちの職員からは「以前より介助が楽になった」との声がきかれた。今後の課題として一部職員の中に、知識の習得は認められたが、実技において重心移動での介助が身につかず、今までのもち上げる介助の癖が抜けきれない者がいた。

自身の体を守るためにも、福祉用具の適正な使用は必要であり、今後もチェックシートを活用しながら「利用者にも職員にもやさしいケア」を水平展開していきたいと思う。

©2025 公益社団法人 全国老人保健施設協会

口演 | 体位保持

2025年11月27日(木) 13:00 ~ 14:00 第6会場（海峡メッセ下関　8F 804会議室）

[O-G001] 体位保持１

座長：三裏 進（介護老人保健施設三滝ひまわり）

13:40 ~ 13:48

[27-O-G001-06] ポジショニングの対応と介護職員への意識調査について

神奈川県　○鈴木 健太 (介護老人保健施設　ゆめが丘)

《はじめに》　介護施設におけるポジショニングとは、体動困難な利用者に対し、クッション等を用いて安楽な姿勢を整えることである。ポジショニングによって、関節の疼痛、拘縮の予防、褥瘡の予防、筋緊張の緩和を図ることができる。当施設の入所棟では拘縮、褥瘡への対応としてポジショニングを実施する際、介護職員よりリハビリ職員へ依頼。調整後、写真を使って周知するようにしていた。実際は、写真を使用していても、写真通りにポジショニングが実施できていないことや、状況が変化していても柔軟に対応できないという問題が散見されていた。利用者の中には、褥瘡の増悪、寛解を繰り返す方や関節拘縮が進行してしまうこともあった。今回、ポジショニングにおけるケアの質の向上を図るため、ポジショニングの実施、調整方法をリハビリ職員主導のものから介護職員主導のものへ変更。介護職員により、適宜、ポジショニングを調整しつつ行えるようになることを目標に取り組みをおこなったので報告する。《期間》令和6年12月2日～令和7年2月1日《対象》当施設の入所棟介護職員27名《方法》ポジショニングの周知方法の取り組み開始時に現在のポジショニングへの意識に対してアンケート調査を実施。同時期に介護職員へフロアでのポジショニングの評価を依頼した。その評価を元に、ポジショニングの検討を行った。その際のポジショニングの指導、周知方法を現状の「リハビリ職員対応後、写真を使用して周知」より、「介護職員主導で実施。それに併せてリハビリ職員が評価、助言を行う」形式に変更。8週間後、再度アンケート調査を実施した。《結果》アンケート回収率は44.4%。各設問の結果は以下の通りになった。（1）ポジショニングについての学習状況は、取り組みの開始時は学習に利用したツールが1種類の職員が55%、2種類の職員が27%、3種類の職員が9%、自己学習を行えていない職員が9%であった。取り組み終了時は学習に利用したツールが1種類の職員が59%、2種類の職員が33%、3種類の職員が8%であった。（2）ポジショニングの必要性については、取り組みの開始時、必要と感じていた職員は92%、業務で決まったことだから行っていると回答した職員は8%であった。取り組みの終了時は、必要と感じている職員が83%、業務で決まっていることだから行っていると回答した職員が17%であった。（3）ポジショニングについての自信については、取り組みの開始時、自信がない50%、どちらとも言えない42%、自信がある8%であった。取り組みの終了時は自身がない67%、どちらとも言えない33%、自信がある0%であった。ポジショニングについて不安に思うことの記述式の設問では、拘縮が強い利用者の対応、日によって変化する状態に合わせて対応できているのか、今持っている知識が正しいのか、痛みが出やすい人の対応といった記述が多く見られた。　介入方法の変更後のポジショニングの質についても、あまり大きな変化は見られなかった。ベッド上でのアライメントの崩れやクッションと身体の隙間、服のヨレ等、改善すべき点が多く残っていた。また、不十分なポジショニングの状況について気づきのある介護職員も少なかった様子があった。《考察》　アンケートの結果より、職員のポジショニングに対しての意識は取り組みの前後で大きく変わらず、ポジショニングの必要性は感じているが、ポジショニングの実施に対して自信が持てない職員が多いことが分かった。学習状況については、過半数の職員が施設内集合研修に止まっていた。ポジショニングについて、学習する際に複数のツールを用いて能動的な学習を行えていた職員は少なかった。職員の意識を変えていくためには、個々のスキルアップのための意欲向上、学習のための環境づくりが必要と考えた。　ま

©2025 公益社団法人 全国老人保健施設協会

た、ポジショニングの精度についても大きく変わらず。クッションと身体の隙間、アライメントの崩れ、服のヨレ等、改善すべき点が多く見られた。この点については、基礎知識が習得できていない職員が多い、リハビリ職員の介入がフロアからの依頼に合わせて対応していたため、介入の機会が限られていた。ポジショニングの周知方法が曖昧だったことを要因として考えた。《まとめ》　今回のポジショニングへの取り組みを通して、職員のポジショニングに対する意識や技術は大きな変化が見られず、職員各々の基本的な技術、知識不足があるように感じた。今後、職員のケアの質の向上を図るための取り組みとして、まず職員それぞれに施設内での集合研修やeラーニングでの学習機会が必要と感じた。その際、ポジショニングの基本的な技術だけでなく、概要や目的の学習も必要と考えた。ポジショニングの周知方法については、毎日の申し送りの時間や臨時のカンファレンスを活用し、情報共有の場を増やしていくことが必要と考えた。

©2025 公益社団法人 全国老人保健施設協会

口演 | 体位保持

2025年11月27日(木) 13:00 ~ 14:00 第6会場（海峡メッセ下関　8F 804会議室）

[O-G001] 体位保持１

座長：三裏 進（介護老人保健施設三滝ひまわり）

13:48 ~ 13:56

[27-O-G001-07] ノーリフティングケアの定着をめざして

寿生苑の取り組みと課題

島根県　○高野 伊都子, 來間 厚子, 尾添 由起子, 山岡 鮎美 (介護老人保健施設　寿生苑)

寿生苑3階　高野伊都子

1.はじめに

寿生苑では、慢性的な人材不足と、職員の腰痛をはじめとする身体的負担の増大という課題に直面している。この状況を改善し、職員が安心して安全に働ける職場、利用者が安全で安心してケアを受けられる体制を構築するため、約半年前にノーリフティングケアの導入を開始した。この取り組みを通じて職員の意識改革が最も重要だと感じ、現状把握のためのアンケート調査を実施。その結果から、今後の課題と具体的な方向性が見えてきたので報告する。

2.方法及び実施

2024年秋に理事長と施設長によるノーリフティングケア取り組み宣言があり職員への説明施行、冬にスタンディングリフトのデモ機を試用し購入。現在寿生苑には、床走行式リフト、スタンディングリフトHUG、シャワートロリー、スライディングボード（臥床用・車いす用）各1台、スライディングシート2枚がある。

以下のステップで取り組んだ。

1)職員へのアンケート調査（痛みについて）: 寿生苑入所3階(50床)の看介護職員22名（20～60代）を対象に、腰痛の有無、その他の痛みの有無、疲労感、精神的疲労について調査

2)ノーリフティングケアの必要性に関する勉強会の実施

3)現場での実践促進:

・福祉用具の使い方を共有

・移乗介助が必要な利用者と、職員・利用者に負担がかかる場面を記録

・適切な福祉用具と使用タイミングを検討し写真で示す

・「これだけ体操」のポスターを掲示し、ケア前の実施を推奨

・ボディメカニクスに基づいた不良姿勢の改善を促す

4)ノーリフティングケアの取り組みに関するアンケート調査（現状把握）: 勉強会への参加状況、資料の閲覧状況、自己学習の有無、必要性の理解度、各福祉用具の使用状況、「これだけ体操」の実施状況、ボディメカニクス導入状況について調査

3.倫理的配慮

アンケートは無記名とし研究目的以外には使用せず処理した。

4.結果

【痛みに関するアンケート結果】

約5～6割の職員が腰痛やその他の痛みを抱えながら勤務しており、痛みがない職員は2割前後だった。ほとんどの職員が疲労感を感じ、約半数が年々疲れやすくなっていると回答。精神的な問題を感じていない職員は4割だったが、1割の職員は気持ち的に沈み余裕がないと感じている。これらの結果は、職員の身体的・精神的負担軽減が急務であることを示している。

【ノーリフティングケアの取り組みに関するアンケート結果】

・勉強会参加は半数以下だったが、資料はほとんどの職員が目を通し、約2割が自主的に学習していた。結果として、ほぼ全員がノーリフティングケアの必要性を理解していた。

©2025 公益社団法人 全国老人保健施設協会

・用具や場面、時間帯によるものの、5～9割の職員が福祉用具を使用できていた。しかし、腰痛がない職員は移乗の際に福祉用具を使わず行った方が早いと感じ福祉用具を使わないケースが見られた。
・「これだけ体操」は8割の職員が実施していた。
・ボディメカニクスを取り入れた移乗方法を実践している職員は3割弱に留まった。
・使用して良かった意見として、入浴時はリフトやHugを使用していて楽に移乗ができる。立位不安定な利用者にHugは助かる。Hugを使用しトイレに行ける利用者が増えた。スライディングボードを使用し移乗がスムーズになったという意見があった。
・その他の意見として、ナースコール対応や見守り対応の利用者が多い時や夜間は難しい。指示が通らない利用者には使いにくい。利用者が怖がって拒否するなど対象者がいない。用具がすぐそばにないので使いにくい。使い方がいまひとつわからない。使用する利用者を明記すると良いなどの意見があった。

5.考察

ノーリフティングケアの必要性は職員のほとんどが理解しているものの、福祉用具の不足や使い方、環境、職員意識などの課題が浮き彫りになった。これらの課題を克服し、「労働安全の視点」と「利用者の自立支援、廃用性症候群予防のケアの視点」でノーリフティングケアを推進するため、寿生苑では以下の計画を立てていく。

1)移乗介助が必要な利用者と負担場面の継続的な特定・共有（現在実施中）
2)福祉用具の使用場面を写真付きで掲示し誰でもわかるように可視化（現在簡単に掲示中）
3)福祉用具の使い方の勉強会・研修会（実技中心）の実施と全職員の習得を目指し福祉用具店と連携
4)必要な福祉用具の計画的購入を働きかける（補助金利用等）
5)夜間が困難な場合日中だけでも積極的に福祉用具を使用する
6)「これだけ体操」の定時実施を促しケア前の習慣化を図る（現在実施中）
7)福祉用具とボディメカニクスを取り入れた移乗方法に関するトレーニングをリハビリ職員と連携して実施
8)関連資料や動画の案内による学習支援
9)自分に合ったベッドの高さでのケア実施など環境調整の促進
10)職員への理解度テストの実施
11)取り組みが軌道に乗った後の腰痛など痛みに関する再アンケート実施

現在は委員会を設置せず、師長と看介護主任が中心となって進めているが、職員に浸透した段階で委員会を設置し、リスクマネジメントのPDCAサイクルを回していく方針である。ルールを定め、教育を通じてスキルを定着させ、実践することで成果が上がると考える。

6.おわりに

ノーリフティングケアを進めていくために必要なことは、職員一人ひとりが「働き方を変える」意識をもてることだと考える。実践しながら有効性を何度も伝えていくことで、使用方法をマスターし、職員利用者共に良い結果が表れれば、職員全員が積極的に使用していけると思っている。数年後の寿生苑に期待したい。

©2025 公益社団法人 全国老人保健施設協会